

## 昭和時代後期の年賀切手

永吉 秀夫

大戦直後の1949年(昭和24)以降、毎年欠かさず年賀切手が発行され、現在に至っています。1950年以降は、くじつき年賀葉書の賞品としての「お年玉切手シート」も発行されるなど適度な変化があって、これらの年賀切手はカタログコレクションから「一歩進んだ収集」の対象として、適当な存在のひとつです。

昭和30年代の額面5円時代は、普通切手よりひと回り大きなサイズでした。(料金過納ですが)年賀葉書使用のために年内に葉書額面で20面シートを発行し、年が明けてからはくじつき年賀葉書の当選発表後に4枚組み合わせのお年玉切手シートを発行、という形態が定着していました。しかし額面7円時期最終年の1972年(昭和47)からは普通切手サイズの100面シートとなり、年賀葉書用の普通切手という性格が目立つようになりました。これ以降昭和時代末期までの額面10、20、40円時期は、年賀切手の歴史上最もつまらない時代であると言えます。お年玉切手シートの発行が続いたのが唯一の救いと言える時代でした。

この時期、特に額面20、40円時期については、平成の初期に手書きリーフを作ってから、たまたま手に入った消印バラエティを貼り足すくらいで放置状態でしたが、最近になってようやく他分野と同じレベルのリーフを作ることができました。レベルアップのポイントは、100面シート切手と小型シート切手との完全分類。この時期に限らず、年賀切手の100面シートと小型シートは製版の向きが縦横逆で、切り取った単片使用済切手であっても、紙目の向きで確実に分類することができます。大部分の年の「縦型切手」の場合は、100面シート＝縦紙、小型シート＝横紙です。電子製版が採用された1983年と85年以降は、菱形スクリーンの向きにも違いが生じたので、封筒に貼った状態であっても確実に分類することができます。

次ページのリーフは初年1972年を整理したのですが、この年は年明けに郵便料金改訂が控えていたため、お年玉切手シートは年賀葉書用と色違いの10円額面で発行され、その10円額面の100面シートも発行されました。その使用済切手は、上述のように紙目で分類してありますが、本当は小型シート発行前の消印が読めるもので揃えておきたいものです。貼られている5点はすべて小型シート発行後の使用で、紙目で分類してあるとは言え、縦ペアの使用済以外はイマイチ説得力に欠けることがあります。

このリーフには小型シートだけ未使用で貼ってあるのが目障りですが、これはカタログコレクションを兼ねたリーフだからです。もし切手展などで展示する機会があれば、別の使用済コレクションに納まっている丸ごと使用済(右図)に差し替えるつもりですが、そういう機会がやってくることは多分ないでしょう。



額面10円期の年賀切手についてはカバー類もある程度集めていますが(例えば275号掲載の多数貼り外信便)、20、40円期は各年1リーフで1989年(昭和64)まで、リーフ作りを終えました。

年賀切手はそののち平成時代に入ると、封書額面やくじつき切手の発行、消印の切り替えに伴うバラエティ、写真付きオリジナル年賀など、楽しめる要素が拡大しました。それらを整理したリーフは、スタンプショウかごしまでも何度か展示したことがあります。

